Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1996, Vol. 43, 175 − 186.

青年期の対人的交渉方略に関する研究

― INS モデルの検討と対人的文脈による効果 ―

長　峰　伸　治[1)]

問題と目的

近年，青年期の対人関係に関しては，社会認知的な視点からの研究がなされ，青年の対人関係の発達は，青年個人の認知発達に伴う社会的コンピテンス（他者とうまくコミュニケーションをとったり，交渉したりする能力）のレパートリーの増大に拠り，重要な他者との関係が互恵性・相互性を持った関係になると考えられている（Youniss & Smollar, 1985 ; Selman et al., 1986)。重要な他者との文脈の中での社会認知の発達の解明をしてきたSelmanは，子供同士の実際のコミュニケーション場面の観察による研究（cf. 1983, 1984）で，子どもたちが実際の対人的葛藤をどのように解釈し，解決していくのかについてのプロセスの検討を行ってきた。その中で児童や青年の社会認知の発達を考える上での鍵概念として「社会的視点の調整能力（Social Perspective Cordination）（自己と他者の社会的視点を認知的にも情緒的にも分化させ調整する能力)」の発達の重要性を強調して，この能力の発達モデルをもとにSelmanら（1986）は，対人的交渉方略：Interpersonal Negotiation Strategy（以下，INS）という概念モデルを提唱した。

INSは，これまで社会認知の発達を研究する上で別々に捉えられていた2つの側面，いわゆる，社会的情報処理（対人的問題解決）プロセスに焦点をあてた機能的（functional）側面と，認知構造の質的（段階的・発達的）な変化に焦点をあてた構造的（structual）側面を統合したモデルであるという点で意義がある。つまり，INSでは，対人的な問題を解決する際にはいくつかの情報処理ステップからなるプロセスがあり，それらのステップには，それぞれ，未分化で自己中心的なものから互恵的・第三者的なものへと変化していくという順序をもったレベルが設定されている。さらにINSには，対人的問題を解決する際に，自分の欲求を変えるのか，他者の欲求を変えるのか，両者の欲求を協調させるのかの3つの対人的志向（Interpersonal Orientation）が設定されている。

Selmanら（1986）の研究でINSの信頼性・妥当性が確認されて以降，INSのレベルが児童・青年の実際の社会的適応に有意な予測力を持つことが示され，臨床的な領域においても治療的実践を含めた研究がなされてきている（Leadbeatersら，1989 ; Beardsleeら，1987 ; Lyman & Selman, 1985)。本邦においては，渡部（1993, 1995）によって，INSモデルが日本の児童（小学生）にも適用可能であることが示された。しかしながら，INSの研究はまだ始まったばかりであり，日本の青年に関する研究はなされていない。

INSは，様々な対人的文脈における対人的葛藤の解決を調べることができるモデルである。先行研究においても，世代（年長or同年代），関係のタイプ（バイト先or私的な関係）などで交渉相手を8種類（バイト先の店長と同僚，母親，ガール（ボーイ）フレンドなど）設定したSelmanら（1986）の研究，児童を対象に教師とクラスメートの違いをみた研究（Adalbjarnardottir & Selman, 1989）がある。Cooper & Ayers-Lopez（1985）は，INSのモデルが，青年の両親や仲間とかかわる方法の差異を理解するのに役立つことを指摘しているが，INSによる「青年－親関係」と「仲間関係」の2つの差異という視点からの検討はこれまで行われていない。

以上の点をふまえ，本研究では，本邦では初めて青年（中学生と大学生）を対象に，重要な他者を相手とした仮想対人葛藤場面を提示して質問をする個別面接法によってINSを調査を行い，以下のことを明らかにすることを目的としたい。

1．日本の青年にとってのINSモデルの確認・検討を行う。つまり，INSの特徴である二つの側面，構造的側面と機能的側面が日本の青年を対象とした場合に有用であるかの検討である。

2．さらに，対人的文脈を「同性親友」「父親」「母親」

1）名古屋大学大学院教育学研究科研究生

の3つとして，INSがそれらの異なる対人的文脈による関係の持ち方の違いを説明するのに有効であるかどうかの検討を行う。文脈による違いについては，先行研究では，年長者よりも同年代に対する方が，あるいは，バイト先よりも私的な関係の方がINSのレベルが高いこと（Selmanら，1986），教師に対する方が友人に比べてよりレベルは低く，譲歩的（自己変化的）であるとする結果（Adalbjarnardottirら，1989）がある。これらの結果から，(1)親に比べて友人に対する方がより高いレベルのINSを用いること（つまり，より互恵的，相互的に関わる），(2)対人的志向については，親に対する方が自己変化が多く，それは中学生においてより顕著であることが推測される。

予備調査：対人的葛藤場面の作成

Selmanら（1986）の研究では，主人公と重要な他者との間に対人的葛藤（Interpersonal Conflict）が生じている状況から成る8つの対人的ジレンマ課題が使われているが，重要な他者が，バイト先の店長や同僚，母親，ガール（ボーイ）フレンドなどとなっており，アルバイト先での出来事や異性友人とのデートをめぐる問題など，日本の青年，殊に中学生一般にはあまり馴染みのないと思われる状況であった。そこで，このような文化による違いを考慮にいれて，本研究では，対象とする中学生や大学生が日頃よく経験する対人的問題にはどんなものがあるのかについての予備調査を行なった。予備調査は，中学3年生40名・大学1年生60名を対象に，質問紙で「両親（親しい友人）との間で，あなたのしたいと思っていることと両親（親しい友人）が考えていることとが一致しなかったり，両立しなかったり，衝突したりして，あなたがどうしたら良いのか悩んでしまうことをあげてください」という設問をし，回答してもらった。その結果，親との葛藤については，中学生では，子供の要求が，家や親に縛られる形で阻害される形の葛藤を挙げる人が多く，大学生では，自分一人で何かをしようとする要求の高まりを親によって押さえられる（規制される）形の葛藤が多く見られた。一方，友人との間で起こる葛藤については，中学生において（特に女子）は，友達に対する感情や友人関係そのものについての意見の相違に関する反応が多く見られ，大学生においては，共にする活動やクラブ活動場面でおこる意見の相違などが多く出されていた。

これらの結果を踏まえて，青年が日常よく経験するような対人葛藤であり，対象である中学生および大学生の両方の年令層にあうような場面にすることを考慮に入れ，かつ，Selmanら（1986）による対人的葛藤に関する定義：「単なる二者間の意見の不一致ではなく，一方の側の行為のためにもう一方の側が自分のしたいことをできなくなるような状況」に基づいて，相手となる重要な他者を同性親友，父親，母親の3つのタイプにして対人的問題場面（例話）を作成した。（付表1参照）

方　法

1．手続きと調査内容

調査対象者：N市のM中学校の中学1年生57名（男26，女31），N大学の1・2年生60名（男30，女30）の計117名。

実施期間：1992年の11月～12月。

手続き：INSの測定は，Selmanら（1989）の'The INS Inteview Manual'に基づいて，1対1の個別面接法により実施。まず，面接者が被験者に対し，面接についての教示を話したあと，筆者が作成した対人的葛藤場面が書かれた例話（3種類；交渉相手が同性親友・父親・母親）を被験者に提示して1分程度読んでもらい，その後面接者が質問をしていく。質問は基本的な項目を決められた順番にしていくが，被験者の反応によって適宜，補足的な質問（Probing）をする。面接者は，大学生全員と中学生男子に対しては筆者が，中学生女子に対しては女性の大学院生（心理学を専攻）が担当した。筆者以外の面接者に対しては面接実施の前に，面接で行なうこと・注意すべきことについて筆者が説明を行っている。面接にかかった時間は，一人あたり40分～60分間で，面接でのやりとりは，テープに録音し，あとでそのやりとりを文字として記録しなおした。なお，録音したテープの音声が聞き取りにくい被験者，あるいは明らかに面接に拒否的な反応をしていると思われる被験者については分析の対象からはずすことにした。その結果，本研究での分析の対象者は，中学1年生55名（男25，女30），N大学の1・2年生56名（男28，女28）の合計111名とする。

質問項目の構成：

INSでは4つの社会情報処理的ステップ：STEP 1『問題の定義』→STEP 2『代替方略の産出』→STEP 3『方略の選択と実行』→STEP 4『結果の評価』から成っている。そして各ステップに下位項目があり，それら計8項目を決められた順番に質問する。各質問項目の順番は［問題の定義］→［主人公と他者の感情］→［代替方略の産出］→［最良の方略］→［最良の方略後の感情］→［解決の障害］→［障害後の方略］→［結果の評価］である。

STEP 1では［問題の定義］（この話の中でどんなことが問題になっていると思うか？）と［主人公と他者の

感情］（あなたは主人公（または，交渉の相手）がどのように感じていると思うか？），STEP 2では［代替方略の産出］（主人公がその相手との問題を解決するためにできることはどんなことか，あなたが思いつくだけあげてください），STEP 3では［最良の方略］（主人公が問題を解決するために最も良い方法は何か？）と［解決の障害］（主人公が解決方法を取るとき解決の妨げになるような事は何か？）と［障害後の方略］（もしそのこと（障害）が起こったなら，主人公は何をするだろうか？），STEP 4では［最良の方略後の感情］（その解決方法（最良の方略）をとったとき主人公（交渉の相手）はどのように感じたか？）と［結果の評価］（どのようになるとその問題が解決したことになるのか？）である。また，各質問の後に必ず「どうしてそうなのか？」というように理由を尋ねた。

2．新たなレベルの設定

本研究はSelmanら（1989）の'The INS Interview manual'を参考にINSについての面接調査を実施したが，面接で提示した例話は，筆者が本研究のための独自に作成したものであるため，各例話毎の具体的な評定基準についてもSelmanらのマニュアルの評定基準の概略をもとに筆者が作成した（評定基準の概略は付表2参照）。その過程で，Selmanらの設定したレベルのいずれにもあてはまらないような反応が多くみられたので，筆者が反応の意味をSelmanらの理論と合わせて検討して項目毎に以下のように新たなレベルを設定した。

(1)［問題の定義］と［主人公と他者の感情］

全部の例話で，レベル1とレベル2の間にレベル1－2を設定した。レベル1は主人公の立場のみから問題が語られたり，相手の欲求（門限や手伝い）のために主人公が自らのしたいことが「できない」とか「(従わねば)ならない」というように相手とのコミュニケートが遮断されている反応であり，レベル2は主人公自身の要求と相手の要求との間で葛藤があり，双方の意見が平等で正当なものであるとみなしている場合である。しかし，例えば，友人の要求との葛藤に気づいていながらも「相手がなぜ仲良くしないのか」が十分にわからないでいる，または，「～したい」と思っているが「親のいうこともきかねばならない」というように，相手とのコミュニケートは開かれているけれど，自分の視点が強調されていたり，親の要求の強制力が強い反応が多くみられたので，このような反応をレベル1－2とした。

(2)［最良の方略］

全部の例話でレベル1とレベル2の間にレベル1－2を，また，例話1（友人場面）でレベル2とレベル3の間にレベル2－3を設定した。レベル1－2は，自他の要求に気づいていて交渉するのだけれども，その交渉の仕方がどちらかというと自分の要求のために強引に押し切ろうと（懇願）したり，相手とは交渉せずに解決方法を取る場合である。レベル1とは異なって自他の要求に気づいて交渉はするけれどもレベル2ほど自他の要求を互恵的に調整しようとしていない方略である。また，レベル2－3は，方略をとろうとする時に，相手との関係維持についての配慮（例，「相手との関係を保ちたい」）を前面に出しているものの，レベル3のような自他の要求の協調させるのではなく，自他どちらかの要求を変化させる方略である。

(3)［結果の評価］

自他両方の視点に考えていながら，自他のどちらか一方の要求を優先させ，本来の要求と異なる形でもう一方を満たすことを期待して解決とする反応が見られ，レベル1ほど一方的な解決ではないが，レベル2のような双方の要求を互恵的に扱うことができていないという意味で，全ての例話においてレベル1とレベル2の間にレベル1－2を設定した。

3．評定および分析方法

以上の新レベルを加えた評定基準を元に，各項目で0～3までのレベルと方略については対人的志向を評定して，各レベルをそのまま得点とした。その際，新レベルはレベル1－2は1.5，レベル2－3は2.5とした。対人的志向については，葛藤の解決をする際に，自分の要求を変える場合を「自己変化志向」，他者の要求を変える場合を「他者変化志向」，両者の要求を協調させる場合（レベル3のみ）を「協調的志向」と評定し，そのどれにも当てはまらないものを「その他」とした。また，各STEPの得点は下位項目の合計を項目数で割った平均値である。STEP 2のみ，代替方略の数が分析対象となる。

なお，被験者の一部において，筆者と心理学専攻の大学院生の2人が独立に評定を行ったところ，社会情報処理ステップ全体（レベルと対人的志向）の評定の平均一致率は79%であった。

結　果

1．INSの社会的情報処理STEP間の相関

STEP 1～4について得点間相関をみたところ，全ての例話においてSTEP 2を除いたSTEP 1，3，4の間では有意な正の相関（.23～.43，$p < .01$）がみられた。しかし，STEP 2は他のSTEPとの間に有意な相関はみられなかった。（TABLE 1）

TABLE 1　対人的文脈別の STEP 間相関

		STEP 1	STEP 2	STEP 3
STEP 2	親友	.01	—	—
	父親	.05	—	—
	母親	.04	—	—
STEP 3	親友	.33**	.06	—
	父親	.23*	.01	—
	母親	.24*	.08	—
STEP 4	親友	.27**	.12	.41***
	父親	.31**	.17	.44***
	母親	.40***	.12	.26**

* $p < .05$　** $p < .01$　*** $p < .0001$

TABLE 2－1　各 STEP（STEP 1～4）の 3 要因（年令×性×文脈）分散分析（Repeated-Measures）［F 値］

	STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
年令	14.10**	2.37	16.83***	8.65**
性	0.79	0.29	2.00	0.03
年令×性	2.05	4.63*	0.64	0.98
文脈	0.56	14.16***	7.68**	1.66
文脈×年令	3.14*	2.13	2.34	1.97
文脈×性	3.89*	2.69	0.18	2.96
文脈×年令×性	2.12	0.56	0.31	3.07*

* $p < .05$　** $p < .01$　*** $p < .0001$

2．各 STEP の分散分析

各 STEP 得点についての年令差，性差，文脈差を検討するために，文脈（3）×年令（2）×性（2）の 3 要因の分散分析（REPEATED MEASURES）を行った（TABLE 2－1）。その結果，STEP 1，3，4 において年令の主効果が有意であった（それぞれ，$F(1, 104) = 14.10$，$p < .01$；$F(1, 106) = 16.83$，$p < .0001$；$F(1, 106) = 8.65$，$p < .01$）。また，『問題の定義』（STEP 1）で，文脈と年令の交互作用（$F(2, 208) = 3.14$，$p < .01$），文脈と性の交互作用（$F(2, 208) = 3.89$，$p < .05$）が有意だった。そこで文脈別に単純主効果の検定を行った。その結果，友人場面においてのみ，男子または中学生より，女子または大学生の方が，問題をより互恵的，葛藤的に捉えている（レベル得点が高い）ことが明らかになった。これらの結果には，友人場面での中学生男子の平均値の低さが影響していると考えられる。『代替方略の産出』（STEP 2）では，文脈の主効果（$F(2, 210) = 14.16$，$p < .0001$）がみられ，文脈間の平均値の比較（統計パッケージSAS の MEAN オプション）から，父親>友人>母親であった。『方略の選択と実行』（STEP 3）では，文脈の主効果（$F(2, 212) = 7.68$，$p < .01$）がみられ，文脈間の平均値の比較（SAS の MEAN オプション）から，友人>父親＝母親であることが明らかになった。『結果の評価』（STEP 4）では文脈×年令×性の交互作用（$F(2, 212) = 3.07$，$p < .05$）が有意であった。ここで下位検定を行ったところ，父親場面で中学生において男子の方が女子より得点が低かった。（以上，平均値の詳細は，

TABLE 2－2　対人的文脈別の各 STEP の平均値［学年別，性別］と標準偏差（平均値（SD））

		中学生			大学生		
		全体（N＝55）	男子（N＝25）	女子（N＝30）	全体（N＝56）	男子（N＝28）	女子（N＝28）
STEP 1 問題の定義	親友	1.60 (0.55)	1.38 (0.40)	1.77 (0.42)	1.93 (0.44)	1.93 (0.50)	1.94 (0.38)
	父親	1.67 (0.43)	1.68 (0.48)	1.67 (0.39)	1.80 (0.37)	1.87 (0.40)	1.72 (0.32)
	母親	1.71 (0.41)	1.71 (0.41)	1.71 (0.42)	1.86 (0.43)	1.84 (0.43)	1.88 (0.45)
STEP 2 方略の産出	親友	2.61 (1.12)	2.83 (1.20)	2.43 (1.04)	2.86 (1.34)	2.57 (1.23)	3.14 (1.41)
	父親	2.80 (1.00)	3.00 (1.18)	2.63 (0.81)	3.34 (1.16)	3.14 (1.01)	3.54 (1.29)
	母親	2.42 (0.99)	2.75 (1.26)	2.14 (0.58)	2.48 (0.99)	2.57 (1.03)	2.39 (0.96)
STEP 3 方略の選択と実行	親友	1.69 (0.46)	1.71 (0.45)	1.68 (0.47)	1.99 (0.40)	2.02 (0.45)	1.97 (0.36)
	父親	1.66 (0.33)	1.65 (0.32)	1.67 (0.35)	1.75 (0.43)	1.82 (0.50)	1.67 (0.35)
	母親	1.52 (0.36)	1.56 (0.36)	1.49 (0.37)	1.77 (0.45)	1.83 (0.44)	1.70 (0.45)
STEP 4 結果の評価	親友	1.94 (0.45)	1.93 (0.50)	1.94 (0.42)	2.09 (0.48)	2.09 (0.48)	2.09 (0.50)
	父親	1.84 (0.46)	1.67 (0.51)	1.98 (0.36)	2.11 (0.38)	2.16 (0.43)	2.06 (0.33)
	母親	1.87 (0.44)	1.97 (0.35)	1.78 (0.50)	1.96 (0.46)	2.01 (0.48)	1.90 (0.43)

TABLE 3－1　STEP 3の下位変数の3要因（年令×性×文脈）分散分析（Repeated-Measures）［F値］

	最良の方略	解決の障害	障害後の方略
年令	28.38***	3.60	6.00*
性	0.95	3.34	0.17
年令×性	0.87	0.03	0.00
文脈	0.45	10.27***	6.93**
文脈×年令	0.72	1.25	2.33
文脈×性	0.53	0.04	0.29
文脈×年令×性	1.61	0.06	0.51

* $p < .05$　** $p < .01$　*** $p < .0001$

TABLE 3－2　対人的文脈別のSTEP 3の3項目の平均値［学年別］と標準偏差（平均値（SD））

		中学生	大学生
最良の方略	親友	1.69 (0.47)	2.07 (0.46)
	父親	1.72 (0.43)	1.97 (0.49)
	母親	1.75 (0.48)	2.05 (0.56)
解決の障害	親友	1.73 (0.80)	1.96 (0.67)
	父親	1.61 (0.63)	1.60 (0.66)
	母親	1.29 (0.61)	1.56 (0.63)
障害後の方略	親友	1.65 (0.54)	1.97 (0.50)
	父親	1.66 (0.48)	1.63 (0.50)
	母親	1.52 (0.48)	1.62 (0.50)

TABEL 2－2）

また，INSの中心であるSTEP 3について詳細な検討を行うために，「最良の方略」「解決の障害」「障害後の方略」の3つの下位変数それぞれについて分散分析を実施した（TABLE 3－1）ところ，「解決の障害」と「障害後の方略」において文脈の主効果が有意であった（それぞれ，$F(2, 196) = 10.27$, $p < .0001$；$F(2, 176) = 6.93$, $p < .01$）が，「最良の方略」では文脈差はみられなかった「解決の障害」と「障害後の方略」について，文脈間の平均値の比較（SASのMEANオプション）から，友人場面の得点が親場面の得点より有意に高かった（友人＞父親＝母親）。なお，「最良の方略」「障害後の方略」において年令差（それぞれ，$F(1,104) = 28.38$, $p < .0001$；$F(1, 88) = 6.00$, $p < .05$）がみられた。（平均値の詳細は，TABLE 3－2）

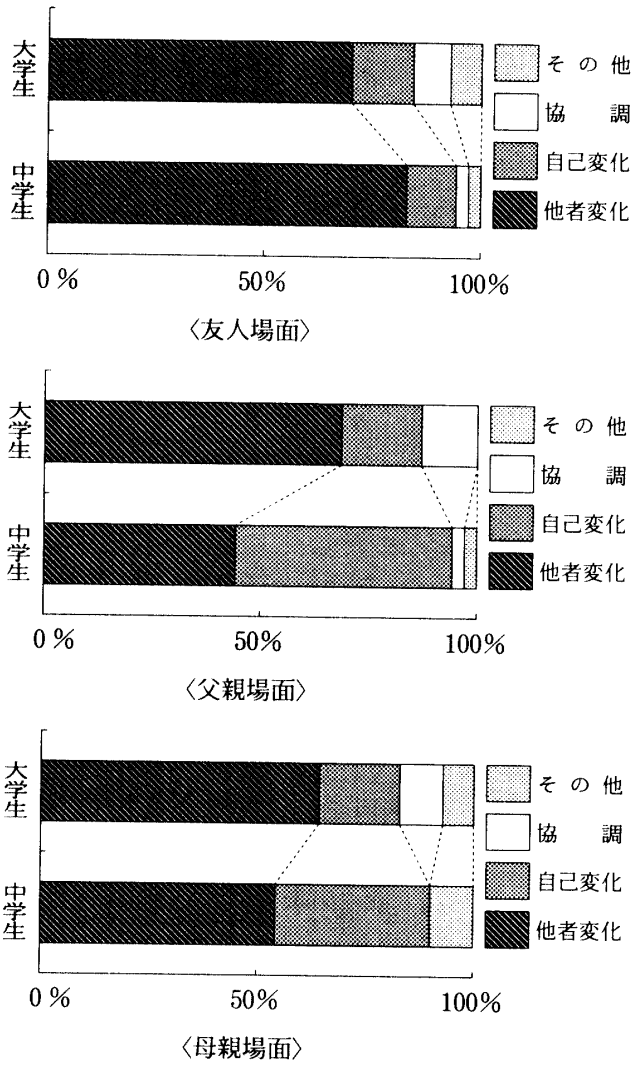

FIGURE 1　各文脈の「最良の方略」の対人志向〔学年別〕の人数比

3．方略の対人的志向

STEP 3の中の2つの方略の対人的志向については，「最良の方略」では，年令別に$\chi 2$検定を行ったところ，父親場面と母親場面で人数の偏りに有意差（それぞれ，$\chi 2(3) = 16.04$, $p < .01$；$\chi 2(3) = 8.10$, $p < .05$）がみられ，友人場面では有意でなかった（FIGURE 1）。残差分析から，父親場面では大学生は他者変化と協調的変化が多く，中学生では自己変化が多い。母親場面では，中学生が自己変化が多く，大学生では協調的変化が多かった。また，文脈別に$\chi 2$検定を行ったところ（FIGURE 2－1），人数の偏りに有意差がみられた（$\chi 2(6) = 22.57$, $p < .0001$）。残差分析から，友人場面では他者変化が多く，自己変化が少ない。逆に父親場面では自己変化が多く，他者変化が少ない（残差分析の詳細は付表3参照）。なお，性別の$\chi 2$検定では有意差はみられなかった。

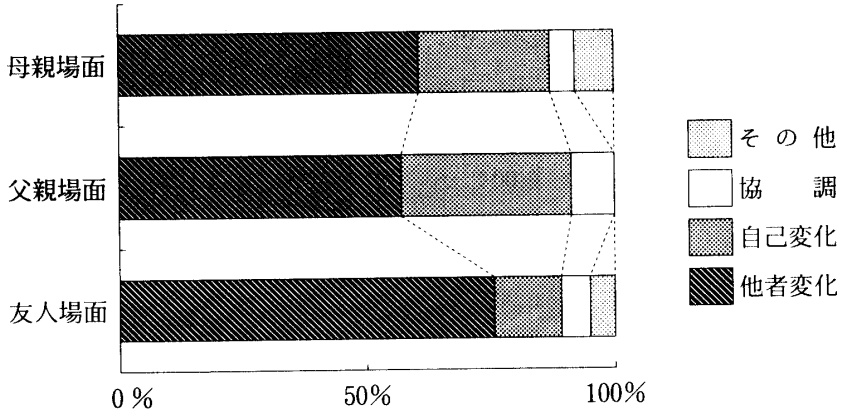

FIGURE 2－1　文脈別の「最良の方略」の対人志向の人数比

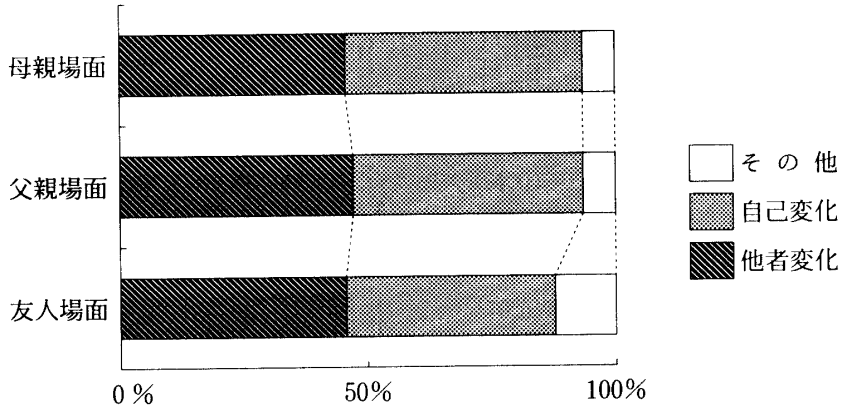

FIGURE 2－2　文脈別の「障害後の方略」の対人志向の人数比

一方，「障害後の方略」では，どの場面でも，「最良の方略」に比べて，自己変化の数が増加して，他者変化の数とほぼ同数になるのが特徴である。しかし，年令別，性別，文脈別のいずれの$\chi 2$検定においても有意差はみられなかった(文脈別については，FIGURE 2－2)。

考　察

1．INS モデルの検討

相関と分散分析の結果から，本研究では中学生と大学生との比較という「年令差」であるために，厳密な意味での「発達的変化」をみているのではないものの，INS モデルの構造的側面，機能的側面については，STEP 2 以外に関しては認められたといえる。

そこで，STEP 2 について検討をする。Selman は INS モデルの情報処理ステップの中の一つに「代替方略の数」を設定して，方略のレパートリーを多くすることが，INS の発達的にも情報処理的にも大事であると捉えてきた。しかし，本研究の結果からは，年令による代替方略数の違いはみられず，また，代替方略の数が多いことが INS の他のステップのレベルを高くすることと関連がみられなかった。このことは，代替数という数と発達のレベルとでは質的に異なるために生じた結果なのではないかと考える。そこで，STEP 2 において産出した方略のレベルの和を代替数で割った「代替方略の平均レベル」を算出し，その平均レベルにおいて分散分析と他の STEP（STEP 3 については，代替方略の中から最良の方略を選択しているために，最良の方略のレベル得点を除いた得点）との相関を求めたところ，有意な年令の主効果（$F(1, 105) = 15.79$, $p < .01$）がみられ，また，一つの相関が10%水準（.14, $p < .10$）であった以外は，各 STEP との間に有意な正の相関（.18～.36, $p < .05$）がみられた。これらのことから，代替数という数よりは，むしろ代替方略の平均レベルの方が INS モデルの 2 側面に適合している事が示唆されたといえる。

また，STEP 2では文脈差がみられたが，この差は，交渉相手が誰であるかということだけでなく，例話の状況が主人公にとって交渉できる余地がどれだけあるかが影響しているのではないかと考えられる。つまり，数の少なかった母親場面は，交渉相手は母親一人に限られることや，母親の要求（「お客がくるので手伝って欲しい」）と主人公の要求（「コンサートに行きたい」）の両方に，動かし難い出来事が背景にあるため，交渉して要求を変化させる方略の幅が限られてその結果，代替数が少なくなったのではないかと考えられる。一方，数の多かった父親場面（または，友人場面）では，主人公，相手の要求が母親場面ほど動かし難いものではなく，交渉次第で変え得る可能性が高いこと，また，交渉の相手が当該の相手だけでなく，第3者（父親場面では旅行にいく友人達，友人場面では新入りの子）にも可能であることによって代替数がより多く産出されたのではないかと考える。これら例話の状況による差異については渡部（1993）でも指摘されており，代替数のみならずレベルへの影響も含めて例話の内容についてのより詳細な検討が必要である。

2．対人的文脈による効果について

(1) INSのレベルについて

STEP 3では，文脈差が見られ，親よりも友人においての方がINSのレベルが高かった。このことは，先行研究からの予測と一致するものであり，INSが対人的文脈による関わりの違いを表す概念であることが示された。しかしながら，STEP 3の下位項目についてみると先行研究とは微妙に異なる結果がみいだされた。先行研究では，INSの中心である方略について本研究での「最良の方略」のみが扱われているが（Selmanら，1986；Adalbjarnardottir & Selman，1989；渡部，1993；渡部，1995），本研究で用いたSelman & Shultz（1989）の'The INS Interview manual'では，「最良の方略」だけでなく，その方略を取った後に起こり得る「解決の障害」とそれに対する「障害後の方略」を設定している。そして，先行研究での結果は，「最良の方略」に文脈差が見られたのだが，本研究ではそれとは違い，「最良の方略」では年令差がみられたが文脈差はみられず，その後に起こる「解決の障害」と「障害後の方略」において文脈差がみられたのである。以上の結果から，初めに選択する「最良の方略」は対人的文脈にかかわらず，社会認知的な能力の発達に依拠するものであるといえる。そして「最良の方略」後に，解決にとっての障害を設定して，その障害を解決していくことは，言い換えれば，相手との関係の中で青年が何を重要視しているか，その関係をどのように捉えているかを表すものであり，そのためにこれら二つの変数は対人的文脈の質の違いがより反映されやすい概念ではないかと考えられる。

また，文脈間の比較からは，交渉相手が友人の場合の方が親の場合に比べて，相手との関係または双方の欲求実現にとって障害になること（例えば「主人公と親友との関係が壊れてしまう」ようなもの）を想定し，その後も互恵的，関係維持的な方略で対応しようとしていることがうかがえる。このことは，相手との関係への配慮を前面に出しながら，自己または相手の欲求を変化させていくレベル2－3の方略が友人場面においてのみ設定され，しかもこのレベルが「障害後の方略」において年令・性問わずみられたことが影響していると考えられ，また，このこと自体が「青年－親関係」との関係の質の違いを表しているといえる。

「解決の障害」「障害後の方略」については，INSのプロセスを考える上で重要であるため，今後更なる検討が必要であると考えられる。

(2) 2つの方略の対人的志向について

「最良の方略」では，友人場面で年令を問わず，他者変化志向が優勢（全体の3／4）であり，他の2つ（親）の文脈と比べても最も多い。親の場面では中学生は他者変化志向と自己変化志向の割合が半々であり，大学生は他者変化志向が優勢であった。これらの結果は，先行研究からの推測と一致している。友人関係では相手と対等な立場であるために，年令に関係なく自分の欲求のために他者変化を試みることができるが，親との関係では初期青年期ではまだ児童期の権威的な関係が残っているために（Youniss & Smollar，1985），そうしたpowerによって自分の欲求を変化させることになると考えられる。一方，「障害後の方略」では，年令，性，文脈問わず自己変化の割合が増え，他者変化とほぼ同じ割合になる。つまり，「解決の障害」が起こると「障害後の方略」では，相手の要求を変えていこうとする人と，自己の要求を変化させて解決を試みる人とに半々に分かれる。本研究で用いたSelman & Shultz（1989）のマニュアルでの研究，つまり，「解決の障害」と「障害後の方略」を導入したモデルでの他の研究結果がみられないため，上記の結果が，他の文化圏でも起こり得る事なのかはわからないが，日本の青年における解決のあり方を示しているといえる。

(3) 中学生男子の特徴について

性差については，文脈や年令との交互作用の結果より，中学生において男子の得点（レベル）が低いという結果

が得られた。『問題の定義』(STEP 1)で，友人場面において反応の多くが「親友が新入りの子と一緒に行くのに乗り気でないのがいけない。仲良くないのはいけない」「親友が新入りのことを気に入らないと，一緒に映画に行けなくなる」とするレベル1およびレベル1－2であった。つまり，親友の気持ちに目を向ける事ができず，親友が新入りの子と仲良くしないのはいけない，あるいはそのために自分の要求が実現できないというように，自分の要求のみを重視する傾向がみられた。また，『結果の評価』(STEP 4)でも，父親場面で中学男子の得点が低く，ここでは，「旅行に行けるかどうか」が決まるか決まらないかに焦点があり，自己の要求にのみに視点がある。これらの結果からは，中学生男子の特徴として，自己主張を行うものの，この段階では自己の視点にのみに立脚した一方向的なものであることが考えられる。

3．INSに関する日本的な特色

本研究では，新たに2つのレベル（1－2，2－3）を設定した。これらのレベルは，Selmanのレベルの移行的なものとして考えたが，日本に特徴的な反応と言う事ができる。レベル1－2は，自他の欲求の差異に気づいているが，交渉を行う場合でも自分の意見を強く押し出す，あるいは交渉をせずに解決策をとるというように，Selmanがレベル2で想定しているような「自他の欲求の差異に気づくこと→コミュニケーションを通して互恵的に調整する」というような対応が必ずしも日本では成り立たないことを示している。INSが提唱された西欧圏では，子どもの頃のしつけにおいて「言語的な自己主張」が重視される（東，1994）というように，自他の違いを明らかにして言語的なnegotiationをすることのできる能力の発達に価値がおかれている文化であるのに対し，日本は「甘え」(土居，1971）に代表されるように，自分の行うことを相手にあえて話さなくても，あるいは，特に母親に対して多かったような「お母さんは許してくれるだろうからとにかく行く」というように自分の欲求を無理に押し通しても，相手は分かってくれるとする精神構造があるからではないかと考える。

レベル2－3については，関係を大事にするのを前面にだしながら自他のどちらかの欲求を変化させるものであるが，これは渡部（1995）が設定した「愛他的スタイル」(レベルではなく対人志向という点では異なるが）と似ていると言え，渡部(1995)の指摘しているように対人関係における「調和」を重視している日本の文化にあったものと考えられる。また，母親場面において，「最良の方略」で「行くのを諦める」とした人が「諦めた自分の気持ちが変わるかも知れない事」が「解決の障害」になって，「結果の評価」は「行くかどうか決まったら」とする反応が女子を中心にみられ，特にこのような「解決の障害」の反応はSelman & Shultz（1989）のマニュアルには見あたらない反応であった。これらの結果は，自分の欲求を変化させて解決を試みるが，それは自分自身が十分に納得して互恵的に処理されたものでなく，自分の要求を我慢して，関係や相手の欲求を第一にするために取る方略であることを示し，ここからも相手との関係の調和を重視している傾向がみられた。これらのことは，Markus & Kitayama（1991）が論じている，東洋文化に特徴的な，人を文脈に依存した存在として認識する「相互依存的自己観」が反映していると考えることができる。つまり，自分の欲求と相手の欲求とを独立なものとして互恵的に調整したり協調させていく西洋圏と異なり，日本ではまず「関係」があり，その「関係」のために，あるいはその「関係」の中で自分がどうするかが重要視されていることが示唆される。

まとめと展望

本研究において，INSモデルが日本の青年において有用であり，そこには日本的な特徴もみられること，また，異なる対人的文脈によってINS（特にStep 3において）に違いがみられることが示された。本研究では，個別面接調査を行い，被験者の反応を詳しく聞く事によって，INSの質を決定できる豊富なデータが得られ，新たなレベルの設定にも至った。面接調査の利点としては，INSの特徴でもある社会的情報処理のプロセスをたどることができることと，一見同じ言語的反応でもその背景として被験者が考えている社会認知的な質の違いを詳細に明らかにするデータが得られることである。本研究では，INSのプロセスについては十分検討できなかったので，今後，プロセスパターンの違いの詳細な検討や対人的文脈の違いによるプロセスの差異の検討が必要となる。また，この面接調査で得られた事はあくまでも仮想対人葛藤場面での社会認知的反応であり，実際の対人関係での反応ではない。仮想場面での認知では，相手との実際の相互作用がないために，理想的な反応であったり，より社会的に望ましい形での反応が出てくる可能性が高いと考えられる。対人関係のプロセスや互恵性・相互性を調べるには，実際の対人関係（少なくとも二者間）場面で起こる関係のプロセスを調べていくことが大事であり，そのことによって，認知と実際とのズレが検討できたり，臨床的な介入につながる知見の積み重ねが可能になると考えられる。

引 用 文 献

Adalbjarnardottir, S. & Selman, R. L. 1989 How children propose to deal with the criticism of their teachers and classmates: developmental and stylistic variations. *Child Development,* **60**, 539-550.

東　洋　1994　日本人のしつけと教育　－発達の日米比較にもとづいて－　東京大学出版会

Beardslee, W., Schultz, L., & Selman, R. 1987 Levels of socialcognitive development, adaptive functioning, and DSM-Ⅲ diagnosis in adolescent offspring of parents with affective disorders: Implications of the development of the capacity for mutuality. *Developmental Psychology,* **23**, 807-815.

Cooper, C. R. & Ayers-Lopez, S. 1985 Family and peer systems in early adolescence: new models of the role of relationships in development. *Journal of Early Adolescence,* **5**, 9-21.

土居健郎　1971　「甘え」の構造　弘文堂

Leadbeaters, B. J., Hellner, I., Allen, J. P., & Aber, J. L. 1989 Assessment of Interpersonal Negotiation Strategies in youth engaged in problem behaviors. *Developmental Psychology,* **25**, 465-472.

Lyman, D. R., & Selman, R. L. 1985 Peer conflict in pair therapy: Clinical and developmental analyses. In M. W. Bekowitz, ed., *Peer conflict and psychological growth.* New Directions for Child Development (no. 29, pp. 85-102). San Francisco: Jossey-Bass.

Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Reveiw,* **98**, 224-253

Selman, R. L., & Demorest, A. P. 1984 Observing troubled children's interpersonal negotiation strategies: Implications for a developmental model, *Child Development,* **55**, 288-304.

Selman, R. L., Krupa, M., Beardslee, W. R., Schultz. L. H., & Podorefsky, D. 1986 Assessing Adolesent Interpersonal Negotiation Strategies: Toward the Integration of Struvtual and Functional Models, *Developmental Psychology,* **22**, 450-459.

Selman, R. L., Schultz. L. H., Krupa, M., Beardslee, W. R., & Podorefsky, D. 1989 *An interview method and scoring manual for the developmental assessment of interpersonal negotiation strategies.* Unpublished scoring manual, Harvard University.

Selman, R. L., Shorin, M. Z., Stone, C.R., & Phelps, E. 1983 A natualistic study of children's social understanding. *Developmental Psychology,* **19**, 82-102.

渡部玲二郎　1993　児童における対人交渉方略の発達　－社会的情報処理と対人交渉方略の関連性－　教育心理学研究, **41**, 452-461.

渡部玲二郎　1995　仮想対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究　－年令, 性, 他者との相互作用, 及び, 人気の効果－　教育心理学研究, **43**, 248-255.

Youniss, J. & Smollar, J. 1985 Adolescent relations with mothers, fathers, and friends. Chicago: University of Chicago Press.

(1996年9月13日　受稿)

謝　辞

本研究は, 修士論文 (1992年度名古屋大学大学院教育学研究科発達臨床学専攻) の一部を加筆, 修正したものです。修士研究に際し, ご指導いただいた蔭山英順教授, 久世敏雄教授 (現, 愛知学院大学) に深く感謝いたします。また, ご協力頂いた被験者の方々, 評定等お手伝いしていただいた方々にお礼申し上げます。

ABSTRACT

A Study on Interpersonal Negotiation Strategy in Japanese Adolescence
−Examination of INS Model and Effects of Interpersonal Contexts−

Shinji NAGAMINE

The purpose of this study was to examine Interpersonal Negotiation Strategy (INS) model based on the theory of Selman, and to study effects of interpersonal contexts (parents-adolescent relationship and friendship) in Japanese adolescence. Subjects were 111 students. They were junior-high school and university students. They were investigated by means of a structured interview of INS in hypothetical interpersonal conflict situation. The results of investigation supported INS model, except 'Generating Alternative Strategies' (STEP 2). In addition, subjects expressed a greater sense of reciprocity or relationship-oriented perspective in situation with a friend than with parents in 'Selecting and Implementing a Strategy' (STEP 3), especially in 'Obstacle' and 'Strategy after obstacle'. Furthermore, the results were discussed in terms of Japanese cultural features.

付表 1：対人的葛藤場面（例話）

例話 1（友人場面）

ヨシコ（タケシ）とジュンコ（マサル）は，同じクラブにいる親しい友達です。ある日，ヨシコ（タケシ）とジュンコ（マサル）は，次の日曜日に何をしようか決めようとしていました。ヨシコ（タケシ）は，数日前に彼らのクラブに新しく入ってきた子をさそって，一緒に映画を見に行きたいと思っていました。しかし，ジュンコ（マサル）は，その新入りの子と一緒に行くことに乗り気ではない，と言っています。

例話 2（父親場面）

ミチコ（カズオ）は，今度の休日に，親しい友人たちと遊び［日帰り旅行］に行くことになりました。その遊びの計画では，家に戻るのが夜の11時＜9時＞になっています。ミチコ（カズオ）は，その旅行に，ぜひ行きたいと思っていましたが，ミチコ（カズオ）の父親は，家に帰るのが10時＜8時＞をすぎるのはダメであると日頃から言っているのを知っていました。

例話 3（母親場面）

ある日，サチコ（ヨシオ）は，サチコ（ヨシオ）の大好きな歌手のコンサートのチケットが手に入りました。サチコ（ヨシオ）は，ずっと前からその歌手のコンサートに絶対行きたいと思っていましたが，コンサートのあるちょうどその日は，家に数名のお客さんが来るために，サチコ（ヨシオ）の母親は，その手伝いをしてもらいたいので，サチコ（ヨシオ）に家にいてほしいと言っていたのを思い出しました。

注：（　）内は男子被験者用　＜　＞内は中学生被験者用

付表 3：「最良の方略」の対人的志向の χ^2 検定の残差分析（有意であったもののみ）

	父親場面［学年別］		母親場面［学年別］		文　脈　別		
	中学生	大学生	中学生	大学生	友人場面	父親場面	母親場面
他者変化	−2.47*	2.47*	−1.03	1.03	3.31**	−2.16*	−1.14
自己変化	3.53**	−3.53**	1.94†	−1.94†	−3.56**	3.09**	0.45
協　調	−2.14*	2.14*	−2.22*	2.22*	−0.17	0.76	−0.59
そ の 他	1.02	−1.02	0.43	−0.43	−0.01	−2.29*	2.32*

† $p < .10$　* $p < .05$　** $p < .01$

付表2：INS評定基準の一部（Selmanら（1989）を基に筆者が一部加筆した）

	＜問題の定義＞	＜感　情＞	＜方　略＞	＜解決の障害＞	＜結果の評価＞
レベル0	問題を述べることができない。	感情の表出がないか，場面に対する過剰な情緒的反応。	衝動的な行動。	障害が思いつかない。	答えられないか，極端な解決。情緒的混乱を示すような解決。
レベル1	たった一人の立場が述べられる。親場面では主人公が，親の優勢な力のために選択が自由でない状態である。「～しなければならない」（has to, need to）の表現がある。	両者の実際的な感情が簡単な理由で述べられる。感情のなかにどちらか一方の視点のみが（優先して）含まれている。	力（Power），支配－服従にもとづいた方略。直接的に問題を扱おうとせずに問題を逃れようとして相手との交渉がない。あるいは，一方的に自分の要求を押しとおそうとする。（単にそうすることがいいことだからという理由で）	コミュニケートなしに主人公の提案が拒絶されて主人公の望みのみが邪魔されていることが述べられている。	ある行動が起こることによる解決。一方的な自己利益に基づいている解決，または一方的に自らが譲歩した解決。
レベル1－2 ＜本文中に記載＞					
レベル2	二人の立場が不一致があり双方の気持ちが同等である場合。あるいは，一人の人物の気持ちの葛藤が表れている。親の要求が「～してもらいたい（want～to）」である。	一方の人間（おもに主人公）の葛藤（自分の要求と相手の気持ちとの間で迷う），または，共感的な感情が表現される。	主人公と相手との間で問題について直接的なコミュニケーションが取られ，両方の欲求を考慮に入れるのだが，それらを別々に満たそうとする。	正当な理由（事情）によって解決にならないこと。双方の満足が満たされない状況（どちらかの望みは満足されているが）。	成功の基準として，二人（主人公と他者）の視点が表現される。主人公と他者の双方が満足をするか，双方が何らかの同意にいたったとき。
レベル2－3 ＜本文中に記載＞					
レベル3	意見の不一致による二人の関係への影響について触れている。関係への関心が前面に出ている。双方にとって共有された問題であることが語られている。	第三者的視点を反映した感情が表出される。相手が，なぜ自分のすることよりも違ったことをしたいのかについて気付いている。つまり，相手の気持ちや要求の理解が相互にできている。	双方が，協力して葛藤解決プロセスを導くような第三者的・関係志向的視点をふくんだ立場を明らかにする。お互いが話し合って，共通点（共通の関心）を見いだすというプロセスがある。こういった経過の中で二人は関係をより強めていく。	主人公と他者の関係の障害になるもの。取った解決方法によって，両者の間の関係にひびが入るような場合（共同でやっていくことの妨げ）。	成功が，良好な関係に基づいき，関係の維持・発展がある。